



街染める現代アート

神戸の秋は現代アートの催しが満載だ。海と山に挟まれて、近代建築やレジャ―施設が多い港町。そのロケーションを活用して、港灣部から六甲山麓、山上までアートが街を染めている。

六甲山中の自然と文化をケーブルやバスを乗り継ぎ、散策のように楽しむのは「六甲ミーツ・アート芸術散歩2011」(11月23日 有料)。昨年に続き2回目の今年は招待作家13組と、応募183人から選ばれた14組が参加した。まずは、六甲ケーブル下駅からケーブルカーに乗り込む。車両内、途中の山中、山上駅の随所に作品が配置される。駅からバスで数分の六甲ホテルは1920年開業のモタニズム建築。招待の濱口直巳作品は、天井から水たまりのような形を

■ 六甲ミーツ・アート／神戸ビエンナーレ

した伸縮性のある生地が水平につられる。時間と光が水面のような階層を通して、モダンな空間に調和して移ろう。

高山植物園内には公募大賞グランプリの山本聖子作品を展示。六甲山に自生する植物の断面を顕微鏡で拡大して模様化したビニールシートに、穴を開けて壁のように張る。その皮膜は、内と外との関係を意識させる。今年のグランプリを受賞したクワクボリヨウタの



神戸の街を見下ろす場所に設けられた西村正徳「新型メガメガホン」オオノエの吹き出しは、音量測定器内蔵(六甲ミーツ・アートから)

詩情豊かな影絵風作品やピシオンホールを通して外界の景色を写し出す作品を展示する。



藤本雄作・緋田雅之・大阪電気通信大学高見研究室「ゆかがみ」は、床紋に足が触れると、水紋が広がる(神戸ビエンナーレから)

昨年、人間ミノムシに扮した作品「糞虫なう」で大賞受賞の角野晃司は14・16日、園内の木にぶら下がって出現した。木道を歩く親子らに声をかけて驚かせたり、コミュニケーションしながら作品化した。今回、角野は大きな繭状の入れものを二つ設置、今度は鑑賞者が中に入ってもらおう趣向だ。自然の音に耳を澄ませる池べりの藤本由紀夫のガラスベンチや、夜間の山上に有機的なかご状の「六甲枝垂れ」を光で浮かび上がらせるなど、六甲の自然や光、娯楽の空間と作品が結び合う。金氏徹平、梅佳代、伊藤彩、染谷聡、パロマモデルら若手作家も個人やユニットで参加している。

一方、「神戸ビエンナーレ2011」(11月23日)は、2年に1度開かれて今年で3回目。市内4会場で計937点が出展される。神戸ハーバーランド(有料)は、コンテナサイズの個室に平面や立体、インスタレ

ては戦後から70年代に活躍した「具体美術協会」を集める。3日に亡くなった具体の中核メンバー元永定正の作品も。カラフルな色の付いた水をナイロンに入れて宙つりにする代表作などを展示する。具体と交流のあったドイツの「ZERO」の作家作品、気圧の変調で内と外の意識を触発する松井紫朗の巨大バルーン作品など、多様な試みを見せる。

六甲ホテルのフロントに飾られる濱口直巳「水平のある場所」(六甲ミーツ・アートから)



せる。(河村亮)